

# 自然教育園におけるホンダヌキとハクビシンの自動撮影記録と糞の分析

吉野 勲\* 萩原信介\*\*

Record of *Nyctereutes procyonoides* and *Paguma larvata* by Sensor Photography and Fecal Analysis  
in the Institute for Nature Study

Isao Yoshino\* and Shinsuke Hagiwara\*\*

## はじめに

ホンダヌキ *Nyctereutes procyonoides* (以下タヌキ) は最近生息が自然教育園においても報告されており (久居, 2007), 東京23区内でも皇居, 赤坂御用地, 新宿御苑などの大規模な緑地において生息が報告されている (遠藤ほか, 2000) (手塚ほか, 2005) (吉野, 2006)。またハクビシ *Paguma larvata* については皇居内で目撃されており隣接する千代田区の市街地で2頭が捕獲されている (遠藤ほか, 2000) ので都心部での生息は確実と考えられている。

自然教育園においても数年前から職員や入園者によってタヌキの目撃がされていた。また園内中央湿地の水たまりにはタヌキの足跡が発見されており, 特別保存地区内の気象観測鉄塔付近の樹林地においてタヌキの糞, また鉄塔上ではハクビシンの糞が確認されていた。

野生動物の基礎調査として生息種の特異性やその行動特性を把握する方法の一つとして, 赤外線センサーとカメラの組み合わせによる自動撮影法がある。自動撮影を用いることにより, 通常目撃することが困難な動物を容易に, かつ, 正確に検出することができる (森, 2007) ということから, 今回自然教育園において自動撮影カメラによる調査を行った所タヌキ, ハクビシンが撮影されたことを, また糞の分析結果も併せて報告する。

## 自動撮影

### 1. 使用機材について

今回の報告で, 使用したセンサーカメラはデジタルカメラとセンサーの組み合わせ (図1) とフィルムカメラとセンサーが一体 (図2) となったタイプを使用した。



図1 デジタルカメラ



図2 フィルムカメラ

\* 東京都世田谷区若林3-8-7

\*\* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Museum of Nature and Science, Tokyo

## 2. 設置場所選定の条件

筆者は自然教育園内に生息する動物を調べることを目的として、撮影場所の選定については、①目的とする動物の痕跡が見られる場所。②センサーが誤作動を防ぐために、直射日光が当たる場所ではないこと。③一般入園者などの人通りの少ない場所などを条件とした。この条件から、設置場所は気象観測鉄塔の南側図3に示す位置とした。タヌキの痕跡として、設置場所の近くには図4に示すタメフン場が存在する。



図3 センサーカメラ設置位置



図4 タヌキのタメフン場

## 3. 結果

### (1) センサーカメラ調査結果

調査は2008年4月19日から2008年9月13日まで図3の位置に2カ所、延べ155日間カメラを設置した。カメラは地上高1mから1.5m樹幹に取り付け、地上を歩く動物が撮影されるように下方方向に光軸を向けてセットした。

その結果、調査期間を通じて哺乳類が31枚撮影されたほか、鳥類が36枚撮影された。撮影された哺乳類はタヌキ4枚、ハクビシン1枚で、イエネコ *Felis silvestris catus* 26枚であった。

タヌキが確認されたのは4月15日、4月22日、6月8日（写真は不鮮明）、9月6日の4回確認された。（図5～図7）

ハクビシンが確認されたのは9月3日で、カメラの直近を通過した個体が確認できたが、カメラに近い場合、頭部しか確認できなかった。額下部から鼻鏡部中央に白線が入っているためハクビシンと同定した。（図8）

鳥類は36枚撮影されたが、シロハラ *Turdus pallidus* 2枚とハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

34枚撮影された。ハシブトガラスは連続して撮影されたので同じ個体と考えられる。

撮影結果はセンサーに反応後シャッターのタイミングのずれや、太陽光線、雨等による誤作動による撮影結果も多く見られた。

なお、撮影写真（図5～図7）から見ると、タヌキは4月に撮影されたものは同じ個体と考えられ、撮影場所に現れたのはいずれも単独の個体と考えられる。今回の調査結果から撮影頻度は低いですが、タヌキ、ハクビシンが園内に生息していることが写真で確認された。



図5 4月15日撮影 タヌキ



図6 4月22日撮影 タヌキ



図7 9月3日撮影 タヌキ



図8 9月3日撮影 ハクビシン

## (2) 糞の分析

タヌキの糞の採種場所は図3のセンサーカメラを設置した気象観測鉄塔から数メートル離れた落葉樹林下のアオキが優占する林床で、2008年春、採種されたものである。タヌキは1回の採種であったが、この溜糞場は少なくとも前年から使っていたようで、2008年4月には前年の溜糞から50個体以上のアケビの当年生芽生えが見られている。採種糞の内容物は表1に示すように、アオオサムシの羽根、節足動物の脚、鳥類骨、羽毛などが見られた。その後同所には糞は一度も見られていない。2008年以前は気象観測鉄塔の使用頻度は年に6回程度であったのが、2008年より月2-3回に増えたことがタヌキが溜糞場として使わなくなった理由と考えられる。

ハクビシンの糞は鉄塔上に限られ、2008年から現在まで2ヶ月に1度程度の頻度で見つかっている。ハクビシンの自動撮影が行われる前はタヌキの糞とも推測されていたが、気象観測用の器具や配線を破損する事故が相次ぎタヌキの仕業としては疑問だったのが今回の調査でハクビシンの被害であることが明らかになった。

糞の内容物は表1に示すとおりであるが、エノキ、ムクノキ、ミズキ、カキノキ、ムベ、ツタの種子など高木種の果実がほとんどであり、タヌキのような昆虫、鳥類は一切見られなかった。カキノキは園内に果実のなる大径木は見られず、おそらく隣接する港区どんぐり公園産の木からの摂食と考えられるが、他は園内に多産する樹種ばかりである。ただ2009年12月20日の糞には図9に示すように粘着性の灰色の糞が通常の糞の上に排便したと見られ内容物には種子は全く含まれず不明である。

タヌキとハクビシンが同所的に生育しているわけだが、ムベ以外は共通種は見られず樹上と地上で食物の重複がほとんど無いことが両種の共存を可能にしている可能性がある。

両種とも個体数、ねぐら、営巣場所等は判明していないが、園内のノイバラ等が優占する中央湿地には獣道や両種の足跡が多数発見されている。



図9 鉄塔上のハクビシンの糞

表1, ホンドタヌキ, ハクビシンの糞  
析

種	採種年月 日	採集場所	動物質	植物質	備考
ホンドタ ヌキ	20080313	自然教育園気象観測 鉄塔の北西9mの林 内	アオオサムシ の羽根, 節足 動物の脚, 鳥 類骨, 羽毛	ケンポナシ種子2	採種日より2週 間以上前に排泄 されていた溜糞
ハクビシ ン	20091111	自然教育園気象観測 鉄塔の高さ10mにあ る鉄製の踊り場	無し	エノキ種子135, 同果皮片多 数, ムクノキ種子99, 同果皮片 多数, ミズキ種子3, カキノキ 種子2, ムベ種子1, ツタ種子 1, ヒメグルミ殻の破片2	採種日より数日 前に排出された 糞
ハクビシ ン	20091220	自然教育園気象観測 鉄塔の高さ10mにあ る鉄製の踊り場	無し	ケンポナシ種子211, 同果柄織 維多数, ムクノキ種子114, 同 果皮片多数, エノキ種子62, 同 果皮片多数, ネズミモチ種子1	採種日より数日 前に排出された 糞

#### 引用文献

- 久居宣夫. 2007. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(17). 自然教育園告, (38):11-12.
- 遠藤秀紀・倉持利明・川島 舟・吉行瑞子. 2000. 皇居内に移入されたハクビシンとタヌキについて. 国立科学博物館専報, (35):32.
- 手塚牧人・遠藤秀紀. 2005. 赤坂御用地に生息するタヌキのタメフン場利用と食性. 国立科学博物館専報, (39):35-46.
- 吉野勲. 2006. 東京との23区内で得られたホンドタヌキに関する生息情報. ANIMATE. (6):15-18.
- 森一生. 2006. 技術情報カードNO. 104. 徳島県立農林水産総合技術支援センター森林林業研究所.